

# 再びハル・ノートについて

百田 陽一



ところでハル・ノートって何？ 簡単に言うとも一九四一年、昭和十六年十二月八日にハワイ・真珠湾攻撃で始まった日米戦争、太平洋戦争の開戦間際に米国のハル国務長官が日本に突きつけた最後通告。その内容を読めば、たとえモナコ、ルクセンブルクのような小さな国でも銃を取って立ち上がるだろうと極東軍事裁判所（東京裁判）でインドのパル判事が表現したことで知られる。正式には「合衆国及び日本国間協定の基礎概略」。歴史研究者たちは「一九四一年十一月二十六日アメリカ提案」と呼んでいる。

日本の傀儡国家、満州国は、当時の日本帝國の存立にとって生命線だった。その満州か

らも撤兵しろ、すなわち満州国を放棄しろという要求は、とてもものめるものではなかった。ところが、ハル・ノートには「china」とあるだけで満州について触れた字句、文言はどこにもないのである。なぜ、中国に満州がふくまれるかどうか確認しなかったのだろう。えっ！そんな基本的な、初歩的なところで食い違いが日米間であったの、と言うやりの場のない思いにとらわれた。じゃ満州が含まれていない、ともし確認されていたらハル・ノートをベースに日米で交渉を継続し、戦争突入は避けられたかも知れない。歴史に「if」は許されないが、ガタルカナルの激戦、アッツ島、サイパン島の玉砕、凄惨な沖縄戦、そして人類史上の汚点と言える原爆使用もなかったかもしれない。……昭和二〇年八月、新生日本になり、七〇年。感無量のものがあります。

（元KKKB専務）